

2024/6/30

ルカの福音書 講解メッセージ⑫

『ルカの福音書 5章 12-26節 日々の糧について』

■祈りと感謝

「さて、イエスがある町におられたとき、全身ツアラアトの人がいた。イエスを見ると、ひれ伏してお願ひした。「主よ。お心一つで、私をきよくしていただけます。」イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐに、そのツアラアトが消えた。イエスは、彼にこう命じられた。「だれにも話してはいけない。ただ祭司のところに行って、自分を見せなさい。そして人々へのあかしのため、モーセが命じたように、あなたのきよめの供え物をしなさい。」（ルカ 5:12-14）

私たちがいやされるのは、神の御心です。しかし、神が来られた第一の目的は、体の病気をいやすためではありません。なぜなら、どんなに体の病気をいやしても、人は必ず死ぬものだからです。重要なのは、いつまでも残るものを作ることです。ですから、いやしの目的は、信仰と希望と愛という神を信頼する心を育てることになります。

イエス様が、いやした人に「誰にも話さずに祭司に見せ、きよめの供え物をするように」と命じたのは、感謝を教えるためです。神への感謝、これが信仰を育てるのです。きよめの供え物とは、感謝をささげるということです。

人間が動物と違う点は、神に祈り、感謝することだと哲学者のキルケゴー尔は言いました。つまり、神に祈らず、感謝しない人生は、人間を放棄していることになります。祈りと感謝はセットです。このツアラアトの人は神に祈りましたから、次は感謝せよと、イエス様は教えておられるのです。あなたは神に感謝をささげているでしょうか。ただ求めるだけで、感謝を忘れないでしようか。

人は体という土台に支えられていますから、体の糧がもちろん必要です。しかし、その土台の上で思考している「精神」が私たち自身ですから、心の糧が本来私たちにとって何よりも必要な糧です。私たちは体を維持するために、健康を考えいろいろな物を食べますが、イエス様は、人はパンだけで生きるのではなく神のことばによって生きると言われました。精神を養うための食事は、神のことばです。神のことばを食べると、神のことばを信頼し、感謝するということです。イエス様は、次のよう

に語っておられます。

「ある村に入ると、十人のツアラアトに冒された人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と言った。イエスはこれを見て言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中できよめられた。そのうちのひとりは、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。そこでイエスは言われた。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」（ルカ 17:12-18）

イエス様は、感謝を忘れないように訴えておられます。感謝を忘れるということは、神のことばを食べていないということです。感謝こそ大切な糧なのです。

イエス様は、「明日のことを思い煩うな」とも教えておられます。私たちが明日のことを思い煩うのは、明日があると思っているからです。しかし、本当に明日が来るかどうかは誰にもわかりません。大切なことは、一日が一生だと思って、感謝して生きることです。

今日考えなければならないことは、十分あります。明日のことを思い煩うのではなく、日々感謝して生きていきましょう。食事の前に感謝して祈り、捧げものをするという習慣を大切にしましょう。こうして、私たちの目は神から離れなくなり、神と共に生きる人生を歩むことになるのです。

「しかし、イエスのうわさは、ますます広まり、多くの人の群れが、話を聞きに、また、病気を直してもらいに集まって來た。しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。」（ルカ 5:15-16）

ここでイエス様は、私たちに非言語メッセージを送っておられます。なぜ、イエス様はいやすという仕事を辞めてまで、祈っておられたのでしょうか。それは、祈りが日々の糧であり、重要なものだからです。私たちが一番にすべきことは、仕事や勉強ではなく、神に祈り感謝することです。これ以上に大切なことはありません。

どのように祈ればよいのかわからない時に参考にするように、神様は主の祈りを教えてくださいました。聖霊のバプテスマによって、異言で祈ることもできます。それができなければ、御言葉を読み、「アーメン」と応答することで祈ることもできます。

祈りについて、実に多くのことをイエス様は教えておられます。祈りましょう。

■信仰と知恵

「ある日のこと、イエスが教えておられると、パリサイ人と律法の教師たちも、そこにすわっていた。彼らは、ガリラヤとユダヤとのすべての村々や、エルサレムから来ていた。イエスは、主の御力をもって、病気を直しておられた。するとそこに、男たちが、中風をわずらっている人を、床のままで運んで来た。そして、何とかして家の中に運び込み、イエスの前に置こうとしていた。しかし、大ぜい人がいて、どうにも病人を運び込む方法が見つからないので、屋上に上って屋根の瓦をはがし、そこから彼の寝床を、ちょうど人々の真ん中のイエスの前に、つり降ろした。」（ルカ 5:17-19）

イエス様は、靈的な休息の後、積極的にいやしのわざを行っておられました。すると、家に入りきらないほどの大勢の人が集まってきた。そこには律法学者や教師もいて、家の前にやってきても、とても部屋の中に入れる状況ではありません。しかし、ここに、どうしてもイエス様にいやしてもらいたいと願ってきた人たちがいました。彼らは、病気の友人を板の上に寝かせたまま、かついでやってきました。

このような状況の時、私たちには二つの選択肢があります。一つは状況の困難を見てあきらめるという選択です。もう一つは、あきらめないで神に近づこうとする選択です。あきらめずに神に近づこうとすること、これが信仰です。信仰を選択すると、神は知恵を与えてくださいます。この時、彼らには、屋根をはがして病人をつり下ろすというアイディアが浮かびました。そして、それを実行したのです。

私たちも、困難にぶつかった時、あきらめるのかあきらめないのかという選択に迫られます。そして、あきらめずに神に求めて祈るなら、神は知恵を与えてくださると約束しておられます。

「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。」（ヤコブ 1:2-5）

では、神からの知恵を受け取って実行した彼らに、どのようなことが起きたのでしょうか。

「彼らの信仰を見て、イエスは「友よ。あなたの罪は赦されました」と言われた。」（ルカ 5:20）

イエス様が見た彼らの信仰とは、あきらめないでイエス様のもとに苦しみを持って来たことです。信仰とは、苦しみを神のところに持っていくことです。そして、苦しみを神の前に差し出した彼らにイエス様は、「友よ。あなたの罪は赦されました」と言われました。

彼らが求めていたのは、病の癒やしです。それなのに、イエス様は罪の赦しを与えられたのです。それは、苦しみは罪を表したものだからです。

人間とは、神のいのちと体という土台に支えられた上で思考する「精神」です。精神は、神の思いと肉の思いの両方から引っ張られています。つまり、いのちと死の両方から引っ張られ、どっちつかずのこの状態にあり、この状態のことを不安と言います。神のいのちによって支えられている私たちは、神の方向に進もうとしますが、そうすると、体が属するこの世が私たちを引っ張ります。そうして苦しみを覚えるのです。つまり苦しみとは、神に近づこうと思っても近づけないことです。そして、このどっちつかずの状態を罪と呼ぶのです。もし私たちが神にすべてをゆだねることができれば、何の問題もありません。それをしたくてもできないから苦しいのです。

パウロは善がわかっているのに実行できないという苦しみを告白しています。見えるものに心が揺り動かされて、神に心を向けることができない結果、苦しみが生まれます。心が神に向かないこと、これが罪だと聖書は教えていました。ですから、苦しみを覚えるというのは、罪の具現化だと言えるのです。

しかし、彼らは何としても神に近づこうとして、ついに近づくことができました。つまり、信仰に立ったのです。「それでも神に近づきたい」との思いによって神に近づくことができ、どっちつかずの状態が改善されたため、「あなたの罪は赦された」と言われたのです。それは、重荷が取り除かれたということです。

これこそが、重要なのです。イエス様は重い皮膚病の人たちをいやした時、「だまっていなさい」と言わされたのは、体のいやしが目的ではないからです。この体はやがて死ぬ時が来ます。しかし、心は天国に持っていくことができます。ですから、この心がどれだけ神に近づくことができるかが、私たちにとっての宝となります。神に近づくことが信仰です。それは、私たちに希望を与え、神への愛そのものです。いつも

でも残るものである信仰と希望と愛こそが、私たちにとっての唯一の宝です。神は、この宝を蓄えさせたいのです。

人は、見える病がいやされことばかりを求めがちですが、これが、神が与える本来のいやしです。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、私のところに来なさい。私があなた方を休ませてあげます」（マタイ 11:28）とイエス様は言われました。苦しみを神のところに持っていくこと、これが信仰なのです。そうすればイエス様が平安を与えてくださり、私たちは休むことができるようになるのです。自分の罪が赦されるという平安、それは体のいやしとは比べ物にならない平安です。どうか困難にぶつかっても神に近くことをあきらめずに、この平安を手にする者となってください。

■恐れに満たされる

「ところが、律法学者、パリサイ人たちは、理屈を言い始めた。「神をけがすことを言うこの人は、いったい何者だ。神のほかに、だれが罪を赦すことができよう。」その理屈を見抜いておられたイエスは、彼らに言わされた。「なぜ、心の中でそんな理屈を言っているのか。『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらがやさしいか。」（ルカ 5:21-23）

「あなたの罪は赦された」と言うだけなら、誰でもできます。しかし、「起きて歩け」と言っても、相手は歩ける状況にないのです。「起きて歩け」と言うほうが、断然難しいのは言うまでもありません。

「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに悟らせるために」と言って、中風の人に、「あなたに命じる。起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい」と言わされた。すると彼は、たちどころに人々の前で立ち上がり、寝ていた床をたたんで、神をあがめながら自分の家に帰った。」

（ルカ 5:24-25）

誰もが不可能だと思っていた中で、中風の人はいやされました。それは、イエス様が罪を赦す権威を持っていることを教えるためです。こうして人々は、イエス様は救い主であることを目の当たりにしたのです。

「人々はみな、ひどく驚き、神をあがめ、恐れに満たされて、「私たちは、きょう、驚くべきことを見た」と言った。」（ルカ 5:26）

人々が、神をあがめると同時に恐れに満たされましたのは、なぜでしょうか。それは、神が権威を持っているからです。最高権威者ですから、私たちは必ず服従しなければなりません。

たとえば大会社で社長と話す機会があったとしたら、「わあ、社長だ」と喜んでばかりいられません。相手は社長ですから、何を言われても業務に従わなければならぬのです。つまり、私たちが権威に対して恐れを覚えるのは、服従しなければならないからです。

なぜ服従に恐れが伴うのか、それはこの世界が服従する世界だからです。この世界は死が支配していて、私たちは死の奴隸です。どんなにがんばっても、死には従わなくてはなりません。私たちは最終的に従うものが死であることを知っています。ですから、従うことに対して非常に恐れを感じるのです。

彼らが、イエス様が神だと分かったとたん恐れを感じたのは、服従しなければならない相手だとわかったからです。しかし、彼らは大きな誤解をしていました。神に服従するとは、自由を手にすることだということを知らなかったのです。この世界には自由がなく、制約ばかりで、最終的に従うものは死です。ですから、従うことに対して悪いイメージしかありません。しかし、神に従うとは自由を手にすることです。これがキリスト教の大きな教えです。

イエス様は、空の鳥や野の花から学ぶように言われました。鳥は自由です。何の思い煩いもありません。しかし、私たちには常に思い煩いがあります。思い煩いがあるということは自由ではないということです。なぜ鳥には自由があるのでしょうか。それは、神が望む通りに生きているからです。信仰とは神の権威を認め、神に従うことです。そして、神に従うことに自由があります。

私たちが自由に生きられないのは、自分の思うとおりに生きようと思って、神に従おうとしないからです。私たちは、神によって造られ、神に規定されたものである以上、神に従わないところには自由はないのです。

手が手以外の働きをしようと思ったら、思い煩うばかりで、自由はなくなります。しかし、手の働きをしようと思えば、自由に動けます。

鳥は神の望むとおりに生きて自由を得ています。あなたはどうでしょうか。神が望む自分を生きようとしているでしょうか。それとも神を無視して、自分が生きたいと思うように生きているのでしょうか。それが思い煩いです。私たちが思い煩いから解

放されないのは、自分の願望を達成しようと、自分に従って生きるからです。

あなたを造ったのは神です。神があなたを規定しました。神が規定したあなたは良きもので、素晴らしいものです。だから、良きもの、愛されるものとして生きていくべきよいのです。私たちは、神に従う時に自由があります。そのことを忘れてはいけません。

神の権威に気づいたとき恐れを感じたのは、従うとは自由を奪われることだと思ったからです。しかし、そうではありません。本来神に気づくということは、神のことばに従って生きることであり、そこには自由があります。しかし、クリスチャンの多くはこのことを完全に見落としています。そこでパウロは次のように述べています。

「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためです。」

(ローマ 1:5)

「私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現されて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。

アーメン。」(ローマ 16:25-27)

信仰とは従順です。従うことに自由があるのです。私たちに自由がないのは、従わないからです。神のことばにアーメンと従う気持ちを持ちましょう。従う時にこそ、私たちは思い煩いから解放され、自由になっていきます。